

北陸寺内町の展開

— 越中国勝興寺寺内町プランを中心として —

天 野 太 郎

- I. はじめに—先行研究の動向と本稿の研究目的
- II. 越中国における真宗拠点の展開
- III. 勝興寺寺内町プランに関する考察
 - (1) 土山・高木場（高窪）期の勝興寺
 - (2) 安養寺（末友）期の勝興寺
 - (3) 古国府期の勝興寺寺内町
- IV. 寺内町の計画性¹⁾の存在
- V. おわりに

I. はじめに

大坂石山本願寺寺内町の建設に関して、『信長公記』に次の一文がある。「(前略) 加賀の国から城作りを召し寄せて、八町四方の構えとして」卷13, 天正8年(1580)8月2日条¹⁾ここでは本願寺寺内町の建設に際して、加賀国の門徒集団・技術者集団が大きく寄与した様子が記されている。

また、他の地域の寺内町建設に際しても、北陸門徒集団が関与した痕跡をいくつか確認することができる。一例を挙げると、蓮如創建と伝えられる三河国幡豆郡(現在の愛知県碧南市)の応仁寺は、三河地域における真宗教団の中心地の一つであるが、ここでは境内外郭に「越前堀」・「加賀堀」と称する堀が明治期まで存在していた²⁾。こうした事例は、北陸門徒集団と畿内・三河の寺院および寺内

町建設との密接な関わりの一端を示すものと考えられる。

北陸地方には、加賀国との国境にあたる越前国河口庄細呂宜郷(現在の福井県坂井郡金津町)の地に文明3年(1471)本願寺第8代宗主蓮如(1415~1499)が初めて建設し、西川幸治が寺内町形成史において原寺内町(Proto-Jinaimachi)³⁾と位置付けた吉崎や、加賀一向一揆の中核地である金沢・二俣、現在までその町割りが非常によく残存している城端・井波(富山県城端町, 井波町), 古国府(富山県高岡市)など、寺内町研究を行なう上で不可欠の位置を占める重要な対象を多く含んでいるだけでなく、同時に上述の都市の建設者集団の存在という観点から見ても興味深い対象地域であるといえる。とりわけ本願寺第5代宗主綽如(1350~1393)が明德元年(1390)井波に赴き、瑞泉寺を開き布教に努めた越中国は、蓮如以前より真宗が広く浸透し、真宗寺院や道場を中核とする集落が早い段階から成立していたものと考えられる。

こうした北陸寺内町に関連した既往研究を概観すると、戦前期に牧野信之助によって北陸が本格的に対象とされたのをその嚆矢とする。牧野は歴史学の立場から寺内町の景観的特質に着目し⁴⁾、とりわけ城端については町の自治に関する研究を行なった⁵⁾。戦後歴史地理学の立場から寺内町研究に取り組んだ藤岡謙二郎も、寺内町の発生原因・領主権の性

キーワード：寺内町・勝興寺・寺内町プランの継承性・囲郭・参道

質・景観の共通性を中心に考察する中で吉崎を寺内町として挙げている⁶⁾。また西川幸治は日本都市史の中で寺内町を取り扱い、寺内町展開史上の吉崎を位置づける代表的な研究を行った⁷⁾。さらに水田義一は、歴史地理学的手法を用いて畿内・北陸を中心とする寺内町プランを広範囲に分析する中で、吉崎・古国府・城端の各寺内町についても立地上・形態上の特質を中心に触れている⁸⁾。吉崎については、金井年が古絵図の分析から吉崎の空間構造について分析しており⁹⁾、こうした吉崎の絵図資料を用いたものとして土屋久雄¹⁰⁾、金坂清則¹¹⁾等の諸研究が挙げられる。また、近年の吉崎に関する総合的な研究成果として『中世大坂の都市機能と構造に関する調査研究—大阪学調査研究報告書 2 越前吉崎「寺内」の調査研究』が存在する。この中で空間的観点からの研究として、仁木宏は吉崎の立地選定に関わる問題、すなわち吉崎が日本海水運を視野に入れた上で遠隔地流通と越前—加賀の地域内流通の結節点に位置することを指摘し¹²⁾、金井年、酒井一光・大澤研一の各氏は絵図・地籍図を中心に分析し¹³⁾、中井均は城郭史の観点から吉崎の防御構造と立地条件について言及している¹⁴⁾。さらに大澤研一は、吉崎「寺内」の空間的・社会的構造に関して明らかにするなど¹⁵⁾、吉崎「寺内」をめぐる研究は近年急速に展開かつ深化していることが指摘できる。

また、他の寺内町についてみると、古岡英明は古国府を対象として勝興寺周辺の囲郭の遺構について現地調査を行っており¹⁶⁾、考古学的な発掘調査として富山県教育委員会による一連の報告書、近年では高岡市教育委員会による寺院周辺の越中国府遺構発掘調査の中で寺院ならびに町の遺構について報告されており¹⁷⁾、佐伯哲也は城郭史の観点から井波・古国府に関して縄張実測の調査を行なっている¹⁸⁾。

しかし戦後の寺内町研究が、相対的に畿内

あるいは近世期に在郷町化したものをその主たる研究対象としてきたため、北陸地域における真宗の発展過程、あるいは真宗寺院・各寺派の成立に関する宗教史のアプローチからの諸研究¹⁹⁾はなされているものの、歴史地理学、都市計画史などの学問領域から寺内町の空間構造に着目した研究という点においては、ここで紹介した吉崎等の諸研究や、土屋敦夫による金沢の研究²⁰⁾などを除くと、北陸寺内町を対象事例としたものが相対的に少なく、その空間構造について言及した研究も事例数が限られているのが現状である。

そこで本稿では、北陸地方に存在する寺内町の中でも越中国に存在する井波・勝興寺に関するものを主たる対象として、その空間構造の特質について若干の考察を試みることにしたい。

II. 越中国における真宗拠点の展開

越中国には現在も多くの真宗寺院が立地しているが、中でも砺波平野を中心とした地域には、井波瑞泉寺・城端善徳寺・古国府勝興寺の3カ所が寺内町として立地していることが確認できる(図1)。これらの多くは台地突端部や河岸段丘上に位置しており、周辺とは高度差を伴って防御される地形である。また本願寺が各地の末寺・門徒組織に下付する各種名号・絵像類などの本尊に添付された裏書の発給状況は、浄土真宗の布教過程を知る上で重要な資料となるものと考えられるが、蓮如の宗主在職期において発給された裏書を総括的に収載した資料である真宗大谷派教学研究所編『蓮如上人裏書集』に拠ると、文明元年(1469)7月に井波瑞泉寺蓮乗に宛てた親鸞絵像、および延徳元年(1489)9月の願主不明の方便法身尊像、計2点が越中国に対して宛てられていたことが確認できるにすぎない²¹⁾。この点に関して金龍教英は、越中国には裏書を発給する対象はなかったものの、真宗門徒の隆盛はすでに相当のものであった点を指摘

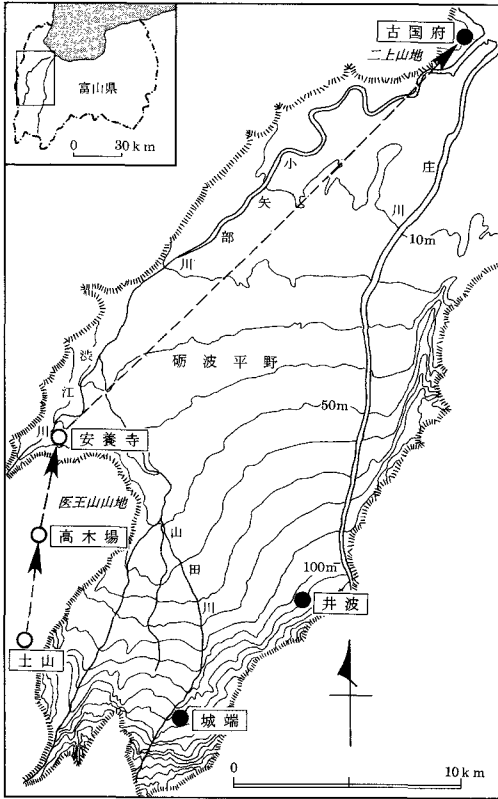


図1 富山県砺波平野における真宗拠点の展開
黒丸は寺内町の位置。図中破線矢印は勝興寺の移転を示す。

参考文献：砺波市史編集委員会『砺波市史』砺波市役所、1965、11頁図を基に筆者作成。

している²²⁾。裏書発給数自体は、近江国(50通)、三河国(33通)等真宗布教が卓越していた他地域に比べて非常に少ないものの、逆に真宗の伝播が早い段階から進行していた可能性も考えられる。

また、加賀国山田光教寺の顕誓が記した『反古裏書』には、越中国に関連した記載として、「コノ外蓮誓ノ次弟実玄ハ、越中国勝興寺住持。(中略)コノ所ニ蓮乗ヲホセツケテ、越中国坊主衆与カトシテ出入アルヘキムネハカラヒタマフ。河上ノ分ハノソカル、瑞泉寺へ与カト定メラル。」(下線部は引用者)²³⁾という一文を見ることができる。「越中坊主

衆」は勝興寺の与力衆であり、また「河上ノ分」とは『闘争記』²⁴⁾等では「川上」とも表記され井波瑞泉寺を意味する。ここから越中国において与力制が定められ、図1にあるように山田川を境として、東が井波瑞泉寺領、西が勝興寺領となっていた²⁵⁾。また天文11年(1542)には本願寺より越中に対し「越中坊主衆」と「河上衆」の2つ番衆勤士が課せられ、砺波郡における越中教団が、勝興寺・瑞泉寺二カ寺の下で組織されていたことが確認できる²⁶⁾。さらに勝興寺所蔵史料である永正元年(1504)8月3日付「下間頼玄奉書」には「其地御坊北国之本寺与御定、諸式御本寺同格、越中一国与力ニ御付被成候(後略)」²⁷⁾との記載がある。このように、勝興寺と井波瑞泉寺は、越中国の真宗教団において勢力を二分する存在であった。

井波瑞泉寺は明徳元年(1390)、本願寺第5代宗主綽如が北陸を訪れた際に創建した寺院である。文明13年(1481)~16年(1484)、一向宗徒征伐を図る福光城城主石黒右近光義と山田川において戦い、そこで勝利した瑞泉寺は、「是より利波郷士・国侍・地頭ノコラズ降参して井波へ来る也、夫より井波を要害にカマへける」(『闘争記』²⁸⁾)と記されるように要害化したと考えられる。また『古城誌』によれば、「井波町家三千余軒集り越中の府と称す」と記録されるほどの賑わいであった²⁹⁾。

その後天正9年(1581)佐々成政による真宗拠点への攻勢があり、後述する安養寺期の勝興寺などと同じく井波寺内町も破却された。その後、佐々配下の前野小兵衛が配され、井波城としている。その後瑞泉寺は文禄3年(1594)旧地西隣に境内を獲得し、現在見られるような門前町が形成されている。

井波城の構造を知る資料として、前田藩の地誌である『越登賀三州志』中の「故墟考」³⁰⁾に拠れば、「井波(中略)南北百二十間東西六十間、外塹跡幅四間許。」との記載があり、井波における围郭の存在が確認できる。

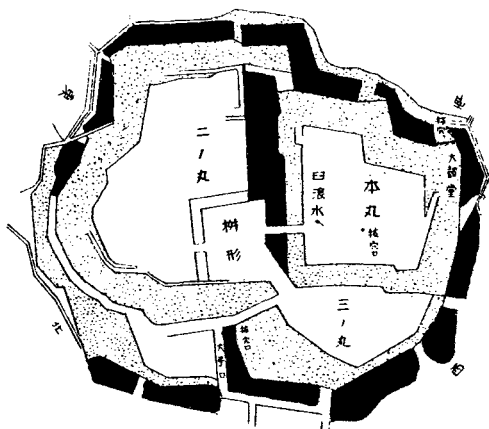
また旧日本陸軍が編集した『第九師管古戦史』³¹⁾には、各地の古戦地・古城跡が地図上に復原されており、井波についても触れられている。同書の井波城郭配図によると、阿弥陀堂を本丸、祖师堂と台所を二の丸、鼓楼堂のあるところを三の丸と比定し、枡形・大手口などの存在を指摘している(図2)。この推定図はその後のほとんどの郷土史誌類に多く引用され、『井波町史 上巻』や近年でも『井口村史』に影響を与えている³²⁾。

佐々支配以前の井波寺内町の空間構造を考える上で、佐々支配以降の改変過程を知る手がかりとなる資料は存在しない。しかし、『闘争記』・『古城誌』中より瑞泉寺段階から要害化されていたことが確認できることから、佐々支配期に全く新規に要害化が進んだのでは

はなく、瑞泉寺を中核としたものに、佐々期の改変が行われたものと想定することができる。

この瑞泉寺とその周辺地域の地籍図に関しては、同地が井波町と旧松嶋村の境界に存在し、かつ両町村の入会地が多く占めているため、関連する地籍図および補充的に土地宝典³³⁾を利用し、現地調査等を行ない、井波御坊推定範囲を復原したものが図3である。

井波の語源ともなった白浪水^{きゅうろうすい}、すなわち瑞泉寺旧地は「字白浪水」としての一筆が存在し、これを中核として外郭部がほぼ円形の全体構造を有している



間十二百北南 間百西東

図2 『第九師管古戦史』における井波城郭配図
出典：第九師団司令部編『第九師管古戦史』1940, 501頁。

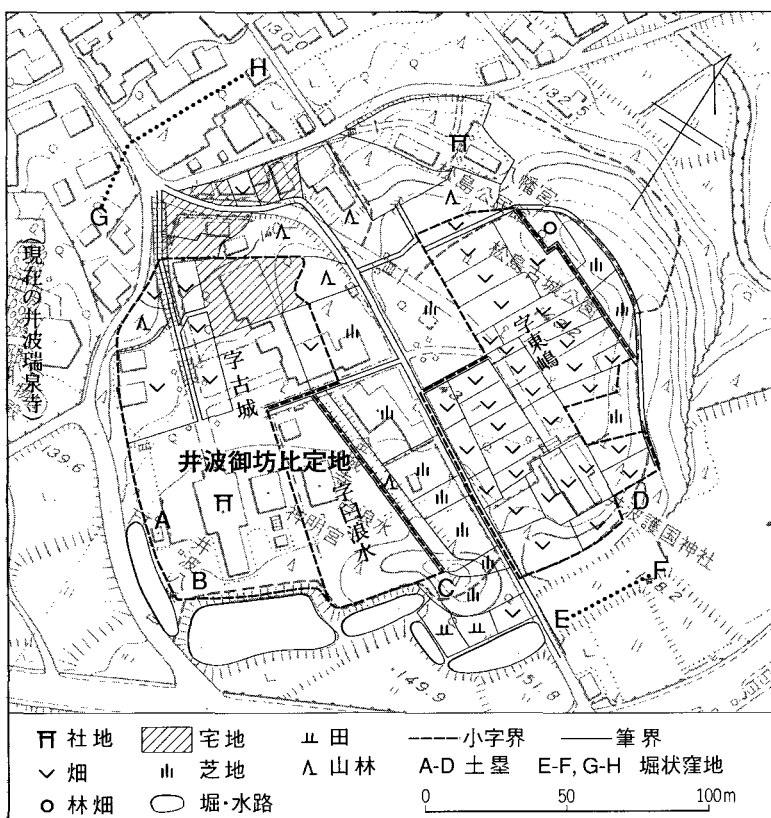


図3 井波寺内町推定復原図
1994年修測2500分1「井波都市計画街路網図」をベースマップとして地籍図・土地宝典の筆界・土地利用を補入。

ことがわかる。また字白浪水区画の東側には現在でも土塁が存在し、これは地籍図上でも確認でき、内部にも土塁を配した構造であったことがわかる。この部分が瑞泉寺を中心とした第一郭、すなわち図2の本丸部分に相当するものと考えられる。前述の佐伯による縄張調査においても同様の二郭から構成されていたことが指摘されている。南側から東側にかけては、A-Dにかけて土塁が連続的に残っており、とりわけ図中Cの部分是最も高く白浪水部分からは約10mの比高差がある。この土塁はそのまま北側のさらにその外側には幅10~20mにわたる堀および堀遺構が存在する。そして北側には、堀跡と比定される水路の一部と、それに連続する窪地、土塁の痕跡が存在する。さらに注目できるのは、白浪水の北東側、現在の井波護国神社境内および松嶋古城公園にかけて存在する小区画地割の存在である。規模・形状から何らかの寺院に関する建築物、あるいは集落の一部が存在した可能性が推定できる。しかし『井口村史』で高岡徹が指摘されるような枡形（枡形に相当する部分の筆界線は確認できるものの）や大手口における堀の食い違いの存在、そして本丸・二ノ丸・三ノ丸からなる三郭の内部構造は図2上では示されるものの、地籍図や土地法典、現地遺構から確認することはできなかった。とりわけ大手方向とされる北側の堀の明確な構造については、地籍図においても水路状の存在が一部確認できるのみで、現在も窪地状の地形は存在するものの明確な構造は確認できない。そうした囲郭に関する遺構の詳細な検討が必要なものの、井波が周辺の自然地形条件を活かしたうえで、北側は自然地形を活かした高度差を中心に、そして南側には堀や土塁などの囲郭をめぐるせた立体的な構造であったことがわかる。

Ⅲ. 勝興寺寺内町プランに関する考察

つぎに越中国におけるもう一つの真宗拠点

である勝興寺についてみることにする。現在の勝興寺は小矢部川河口付近の、大伴家持の和歌に詠まれた二上山の麓から伸びる伏木台地末端部の古国府に位置している。その地名「古国府」から推察されるように、越中国府の所在地と推定されており、高岡市教育委員会による発掘調査の結果、勝興寺周辺から越中国庁と推測される平安期の建物遺構が検出されている³⁴⁾。現在の勝興寺本堂は寛政5年(1793)に西本願寺本堂を模して建立されたもので、その土塁と空堀に囲郭された本堂・本坊等は重要文化財に指定されており、越中国における真宗の一拠点としての威容を今に偲ばせている。この勝興寺は、文明3年(1471)創建以来、数回の移転を経て天正12年(1584)現在の古国府に建立されたものである(図1)。また、こうした寺内町の移動自体については、すでに金龍浄によって指摘がなされているところではあるが³⁵⁾、ここでは各時期における寺内町の空間構造について見ていくことにしたい。

(1) 土山・高木場（高窪）期の勝興寺

勝興寺の概略史について寺史『勝興寺系譜』³⁶⁾に拠ると、文明3年(1471)、すなわち吉崎御坊建設と同年に、蓮如が蟹谷丘陵中の越中国砺波郡蟹谷郷土山（現福光町）に坊舎を建てたことに始まるとされる。

蟹谷郷南部の豪族であった杉浦万兵衛が、来錫した蓮如に帰依し御坊が建立されたとされる³⁷⁾。その住持は蓮如次男の蓮乗が勤め、蓮乗は加賀国浄土真宗の拠点であった加賀二俣本泉寺との兼帯となる。その後も蓮誓（蓮如第四男）、實玄（蓮誓第二子）と一族が住持を勤め、周辺地域の宗教上の核として、本願寺を中心とした真宗寺院体系の一門与力制における一門寺院（一家衆寺院）³⁸⁾として機能することとなる。図4のように、土山御坊は蟹谷丘陵中の標高230m~240mの急峻な地形によって周囲と隔離された場所に立地して

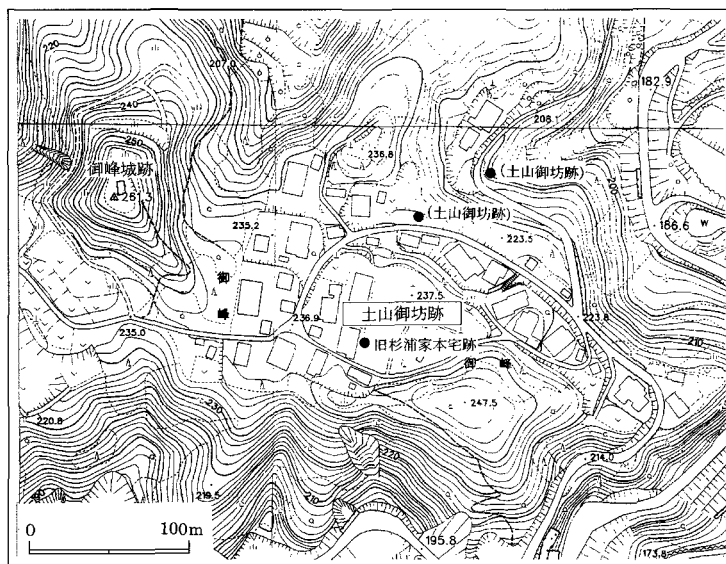


図 4 土山御坊推定地
2000年修測2500分 1 国土基本図

おり、東部および南部とは比高差が30m～40mあることがわかる。御坊推定地は周辺に幾つか存在するが、ここでは地形条件や遺構等から中心部分の周囲では最大の平面上に比定した³⁹⁾。蓮如造作と伝えられる庭園や、蓮如に帰依し御坊を誘致したとされる杉浦家の墓地や旧本宅跡が存在し、この周辺に御坊が置かれていたものと想定できる。

その約20年後の明応3年(1494)には豪族大笹久兵衛の要請により、直線距離で北に約5km離れた同郷内の高木場(高窪)に移転し、永正14年(1517)には佐渡の順徳天皇御願寺院を再興、相続して寺名を「雲龍山勝興寺」と号することとなった。

この高木場における勝興寺所在地周辺の地籍図を現在の地図上に比定したのが図5である⁴⁰⁾。この範囲は、一部を除いてほぼ平坦であり、範囲内の小字名称「字窪」や、地籍図による筆界からみても、いわゆる短冊地割の存在などは確認できないが、図5中の区画の関連遺称として、ジョジャダ、シャナイ(御仏米田)とされる筆があり(図中④・⑤)、ここが寺院跡であるとも伝えられる。さら

に、堂高という区画(⑦)や、ミナミチョウ(⑧)、チョズダニ(⑥手水谷?)と呼ばれるなど、寺院に関連した遺称も存在する。特にチョズダニが東側に位置することから、この高木場御坊の入り口方向が東側であることが想定でき、一般的な真宗寺院の伽藍配置との共通性が見られる。さらに⑩の部分は水田に開墾される昭和50年前後まではカンツキドー(カネツキドー)と呼ばれており⁴¹⁾、これは鐘突堂あるいはそれに関連するものではないかと考え

られる。土山と同様に、高窪に御坊を誘致したとされる大笹家の一族の住居もこの周囲の北・西に隣接して存在している。

高木場御坊推定地周辺の北西方向には蟹谷丘陵を望み、東部・南部とは比高差をもって位置している。さらに外縁部には一部堀あるいは水路と想定される部分が地籍図上確認でき、一定の囲郭の役割を有した可能性を想定することができる。また土山との対比でもわかるように、土山と高窪の自然地形を活かした立地条件や、御坊および関連施設の推定地の形や規模などが類似していることがわかる。

(2) 安養寺(末友)期の勝興寺

その後、砺波郡木舟城主石黒左近の攻撃により永正16年(1519)2月には高木場勝興寺は出火した。その結果、蟹谷丘陵中から、さらに北5kmに位置する北陸道の脇道である小原道沿いの陸上交通の利便性の高い安養寺(現在の小矢部市末友)に再移転することとなった。寺史『勝興寺系譜』にはこの安養寺への移転・再興後「此時法威サカンニシテ礪波半郡ヲ領知ス、一國ノ與力坊主番割ヲ以テ

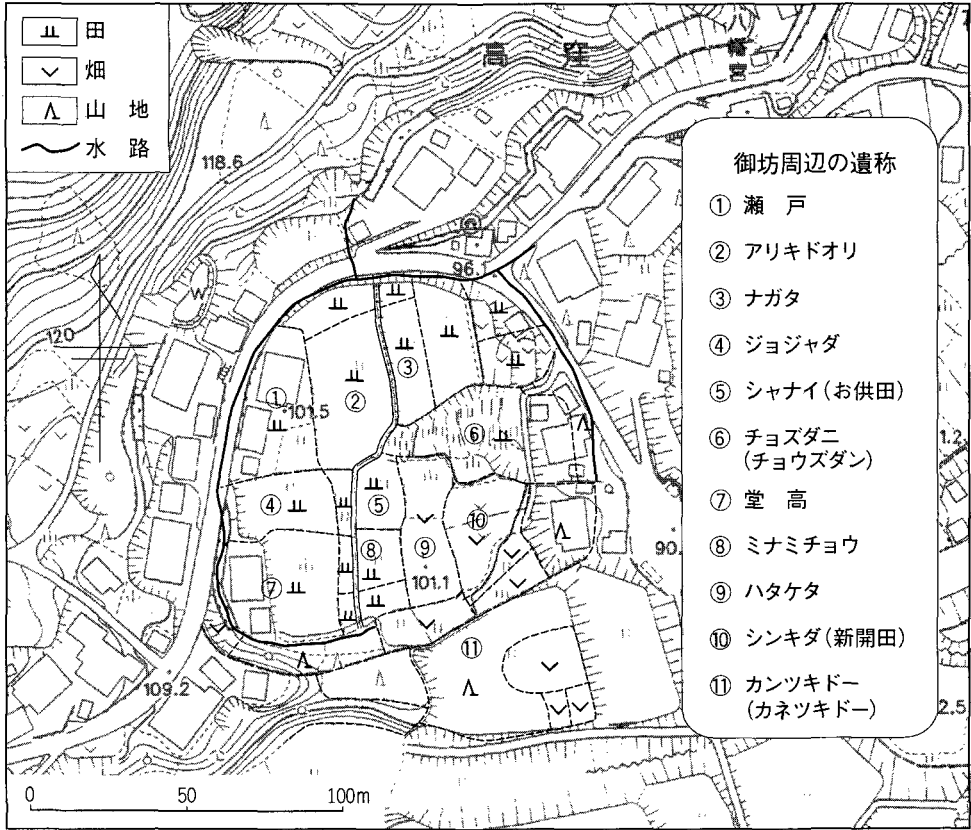


図5 高木場御坊推定地

2000年修測2500分1国土基本図をベースマップに「新川縣管下第二十二大区小四区越中国礪波郡高窪村地引絵図」（明治8年）の筆界・土地利用を補入。

勤番ス⁴²⁾という記述がある。前述の永正元年「下間頼玄奉書」にも見られるように、この永正16年の移転前後の時期において、越中教団が勝興寺・瑞泉寺の二カ寺の下で組織されるようになったものと考えられる。さらに、宮永正運が天明6年(1786)に著述した礪波・射水両郡の地誌である『越の下草』には、「安養寺旧跡(中略)此頃加越一揆乱の折なりければ、城郭を構へて蟹谷郷二九村を領し、邑を安養寺と称して寺院益繁茂し、青侍・町家を合して戸数凡三千軒計有しとなり。」(下線部引用者)との記載がある⁴³⁾。3000軒という数字には検討の余地はあるものの、勝興寺を中核としたある一定規模の集落が存在した可能性が指摘でき、それ以前の土

山・高木場では存在が不明確であった寺内町が存在した可能性がある。

現地周辺は昭和40年代に圃場整備が進み、旧地形等を確認することは困難である。昭和36年、現地在住の長田清作が、当時残存していた遺構や遺称の聞き取り調査を行っている⁴⁴⁾。それによると勝興寺推定地周辺の遺称として「御堂屋敷」・「飛殿町」・「御亭^{おちん}」等が存在していることが指摘され、何らかの集落や、後述する伽藍施設の一つである御亭が存在した可能性がある⁴⁵⁾。さらに集落全体を囲郭する堀、および八幡宮の南側には高さ九尺~六尺余りの「長扉土」(土塁?)跡も存在していたことが指摘されている。

こうした長田による調査報告や、現地調

査, 小矢部郷土史会の現地研修会⁴⁶⁾に同行し確認したもの併せ, さらに福光町医王山文化財調査委員会による二重の堀推定場所⁴⁷⁾を参考とし, 小矢部市役所税務課に所蔵されている「北蟹谷郡末友村地籍図」(明治8年)による本堂周辺の地割を検討し, 推定範囲を

図示したものが図6である。また, 堀・土塁の位置推定については, 1963年国土地理院撮影の空中写真の実体視を通じた判読作業も併せて行なった(図7)。

中心部分には鐘楼堂址と伝えられている区画が存在し, この一筆は昭和36年に勝興寺へ

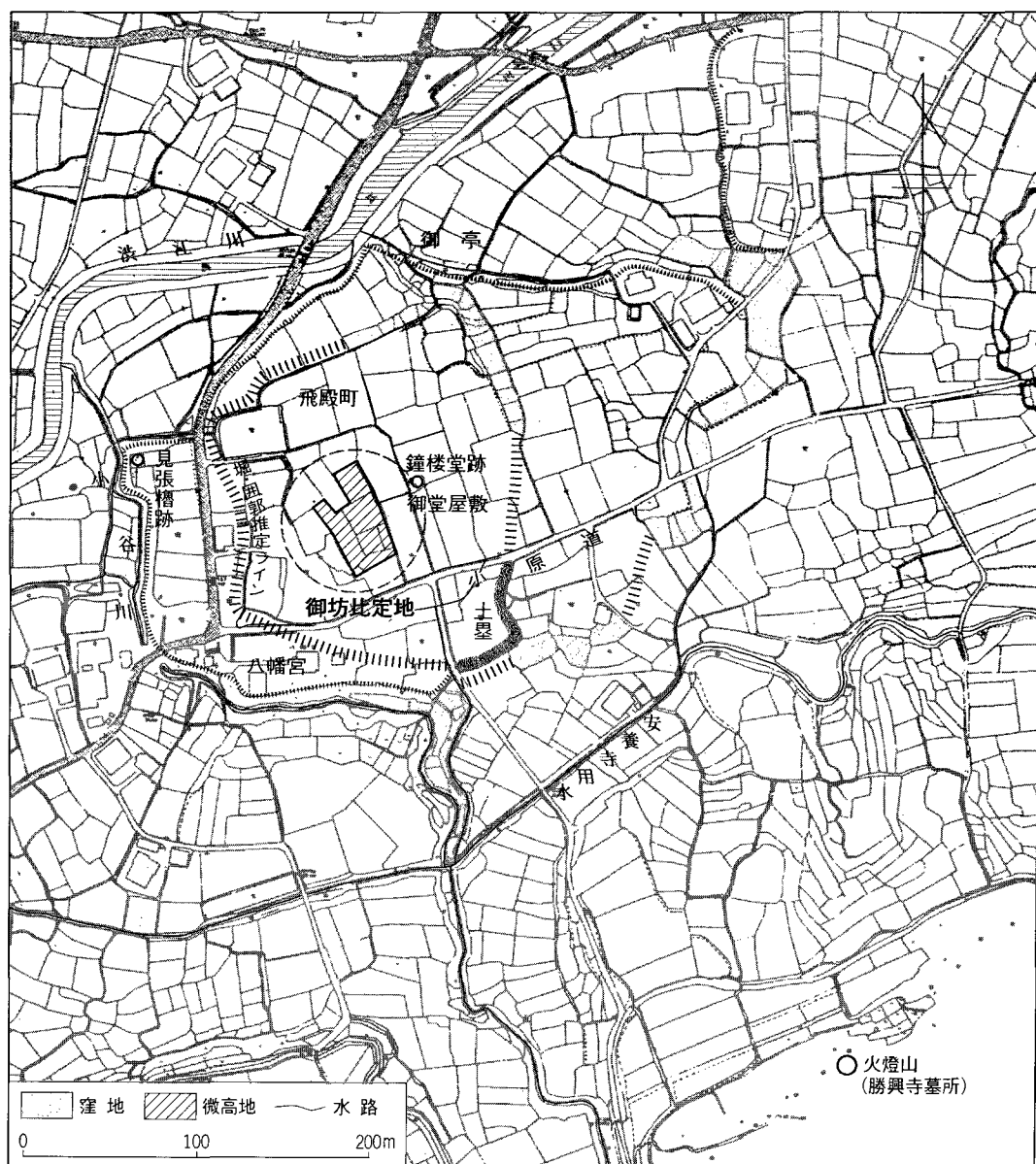


図6 安養寺期の勝興寺寺内町推定復原図
土塁・堀遺構については, 1963年撮影空中写真を使用した。またベースマップには1970年修測6000分1「蟹谷地区従前図」を使用した。



図7 安養寺期勝興寺周辺の空中写真
出典：1963年国土地理院撮影空中写真

譲渡され⁴⁸⁾、現在は小矢部市教育委員会により勝興寺旧地に関する解説板が設置されている。現地周辺は字寺家町となるが、この鐘楼堂址の区画を中心とした周辺部分が通称「御堂屋敷」、また北に隣接した部分が「飛殿町」と呼称されており、また鐘楼堂址の西側に、周辺地割と異なる方位で並ぶ地割がいくつか存在するが、この一角が周辺よりもさらに一段標高が高い。この周辺が寺内町の中心部分、すなわち勝興寺が存在した場所と想定することができる。なお寺院推定地、あるいはその周辺の地割では、短冊形地割等の計画的な集落の存在を示す明確な痕跡は見られない。

さらに囲郭部分についてみると、先に述べた長田の指摘や、あるいは同じく現地在住の萩沢正造による明治14年見取「安養寺御坊跡見取絵図」の記載では、かつて町の南側－西側にかけて高さ九尺～六尺余りの土塁が存在していたとされる⁴⁹⁾。しかし正確な図で位置が示されているのではなく、さらに昭和2年には土塁存在地周辺に八幡宮が移転し、また道路建設、圃場整備等により大きく削平されたものと考えられ、現在では推定地周辺にその明確な痕跡はなく、かつ地籍図上でも土塁

等の存在は確認できない。しかし図7に示したように空中写真の実体視からその一部を確認することができる。また指摘されていたような全体を囲郭する土塁の存在は確認できないが、渋江川・小谷川の段丘を利用し周囲とは高低差が存在し、また河川を含めた自然地形を活かしつつ囲郭が構築されていることがわかる。また空中写真の実体視を通して、圃場整備以前の土地状況をみると、図6に示すように、連続する窪地の存在が指摘でき、長田等が指摘する内部の堀遺構の一部ではないかと考えられる。

ここに示すように、御坊推定地区は二重の囲郭で囲まれ、内側は主として堀、一部に土塁でもって構成され、外側は、北には渋江川に接し、西側－南側には小谷川と堀が存在し、高度差を伴って堅固な防御の構造が存在していたことがわかる。さらに外側の部分は、全体が堀で圍繞されるというよりも、地形条件から判断すると、特に北側の部分については段丘を利用した高低差（約5m）でもって外部と隔絶された構造となっている。見張り櫓跡と現地で言い伝えられている場所は、図中にあるように外郭北西部に張り出した部分に相当し、高低差とともに広く渋江川および対岸を見通すことができる。このような自然地形を活かした寺内町プランのあり方は、前述の井波や北陸・畿内の寺内町とも共通性が存在する。

さらに外堀の東側部分は寺家町・浦町⁵⁰⁾と呼称されており、囲郭の外側にも集落があった可能性が指摘できる。このような勝興寺寺内町の構造は、二重の土塁・堀で囲郭され、『勝興寺系譜』では「安養寺ノ城」⁵¹⁾と表現される景観を有しており、本願寺－内寺内－外寺内に区画された山科本願寺寺内町と同様の複郭構造を有している。また、内側の囲郭に接する形で小原道が町内部を東西に縦貫しており、さらに小矢部川水系の渋江川とも接していることにも注目でき、陸上交通・水上交

通の結節点としても機能する場所に立地していることが指摘できる。

(3) 古国府期の勝興寺寺内町

こうして展開した安養寺（末友）における勝興寺は、『勝興寺系譜』に拠れば天正9年（1581）、木舟城主石黒道之による攻撃の後、同地は破却されたとされる。その後天正12年（1584）、それまでの真宗攻撃の姿勢から一転して真宗懐柔政策に転じた佐々成政・神保氏張によって現在地の射水郡古国府（現在の高岡市伏木）に寺地が寄進され、堂宇が再建されることとなった。この寺地寄進および安養寺期勝興寺がいつまで存続したのかについては、依拠する史料により相違があり、天正9年説（『越の下草』・『小矢部市史』⁵²⁾）・天正12年説（『越登賀三州志』⁵³⁾）等諸説あるが、

近年、斎藤善夫が勝興寺梵鐘について元和3年（1617）の在安養寺銘文の存在を指摘している⁵⁴⁾。一時期に古国府に完全移転したと解するよりも、段階的に移転し、安養寺の地にも何らかの形で寺地あるいは坊舎が元和年間まで併存した可能性が考えられる。また勝興寺の末寺である唯称院が江戸時代中期まで当地に存在したとされ⁵⁵⁾、この事との関連性も指摘できる。

また神保氏張「制札 勝興寺」（天正12年）・羽柴秀吉「禁制 越中国古国府寺内」（天正13年）・前田勝家「禁制 古国府勝興寺」（天正13年）⁵⁶⁾等、越中国に関わる各勢力から寺内特権を獲得することとなり、今日の勝興寺に至っている。ただし、その建設経緯や、時期的な意味からも、それまでの安養寺期に見られた寺内町としての性質は大きく



図8 地籍図にみる古国府勝興寺寺内町
 『新川縣第十六大区小一区越中國射水郡古府村地引繪圖』（明治8年）、「富山縣射水郡伏木町大字伏木古国府町地引繪圖面」（年不詳，明治30年前後）を基に作成。

失われている段階の存在であることには留意する必要がある。

古国府における勝興寺周辺地域については、先に触れた高岡市教育委員会による寺院周辺の越中国府遺構発掘調査の中で寺院ならびに町の遺構について報告されており⁵⁷⁾、また近年高岡市教育委員会によって勝興寺伽藍に関する境内地の実測、建築、ならびに発掘成果に関する報告書が出されている⁵⁸⁾。

古国府における勝興寺は、小矢部川河口付近、大伴家持の和歌に詠まれた二上山の麓から伸びる伏木台地の東端部に位置する。

a：勝興寺境内地

「富山縣射水郡伏木町大字伏木古国府町地

引繪図面」(年不詳、明治30年前後、図8)と、現在の都市計画図上に町の位置を图示したものが図9である⁵⁹⁾。ここで明確なように、境内の区画は「字大伴」の範囲に相当する。また既述の『越登賀三州志』中の「故墟考」には、「古国府城」として次のような記載がある。

「古国府 (中略) 本丸□五十間□□八十二間、二丸七十三間□百□間。今の勝興寺の地也。湟壘猶存す。左右は谷、背後は山に接す。(後略)」

この資料では伏せ字が幾つかあるため、本丸・二の丸とされる区画の正確な規模を判断することは困難であるが、現在の境内附近は

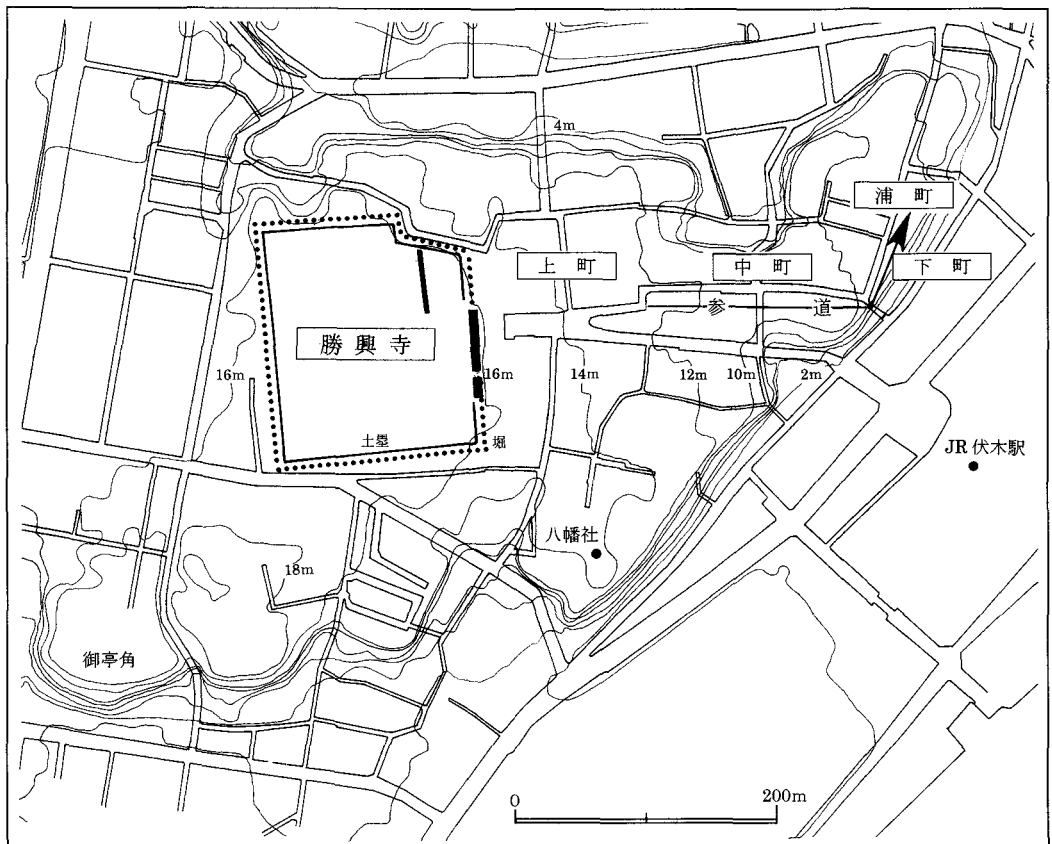


図9 古国府勝興寺寺内町と周辺の地形
等高線は2000年修測2500分1国土基本図による。寺院境内外周の黒色部は水堀、点線は空堀遺構を示す。

標高16-17mでほぼ平坦地端であり、東西約150m、南北約200mの方形の境内地となり、本堂・本坊・経堂などが立地している。

天明6年(1786)の「古国府勝興寺明細帳」⁶⁰⁾によると、寺地1万5千歩、寺領200石、住持以下僧侶20人、その他84名計104名の規模の寺院であった。境内北側・南側も谷が入っており、西側については現在は宅地造成がなされているが、かつては北の谷に通じる窪地であった。すなわち小矢部川方向へ下る東側に参道が形成され、その両側を中心として町屋が形成されている。

また図9からも判るように東側の絵門側には一文字池など水堀が存在し、南・西側の外周にも空堀がめぐり、さらにその内側には土塁の存在が確認できることから、勝興寺境内

は堀と土塁で囲郭されていた可能性がある。さらに北東部の一部には内側に堀が存在していたことが地籍図および現在の地図から確認でき、部分的に二重の堀となっていたことがわかる。

この点に関して、安政3年(1856)の『勝興寺殿御由緒抜書』⁶¹⁾では、

「(前略) 天平18年中納言家持卿越中之為守護職下向有之節之居城ニ而堀土手も二重御座候処 天明年中勝興寺殿本堂再建ニ付堀土手一重埋申候 (後略)」

との記載があり、この史料から関口欣也は一重化した可能性を指摘している⁶²⁾。しかし、北側・南側に比較して、寺内町の東側にあたる本堂正面側は、谷・尾根等の自然地形を活かした形での防御ラインが弱く、寺院を防御

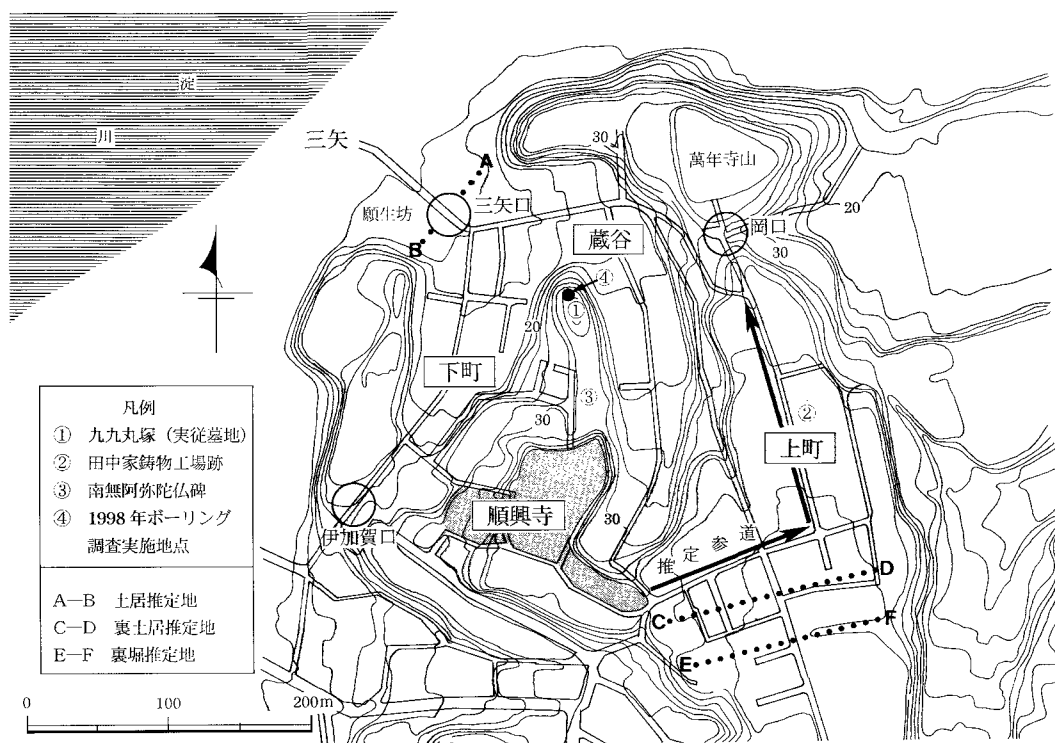


図10 枚方寺内町の推定復原図

出典：拙稿「淀川中流域における寺内町の展開」, 足利健亮教授追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間』, 大明堂, 2000, 238頁図を一部改変。

する上ではやや脆弱な方向である(図9)。また内側の水堀は、外側の土塁ラインに接しており、全体が二重になっているわけではない。そのため、この東側の方向のみ二重に縄張りを強化した痕跡であると想定することもできる。

このように、自然地形を活かした上で、土塁・堀で補完する囲郭の構造に関しては、井波・安養寺や他の寺内町、例えば摂津国枚方寺内町においても同様の構造を確認することができる(図10)⁶³⁾。

b：町屋地区

現在ではJR氷見線伏木駅からの直線参道が存在するが、藤井家文書の「雲竜山勝興寺総門先新設道路敷地実測平面図」によればこれは近代の新設道⁶⁴⁾であり、旧来からの参道はこの新設道の北側に隣接する図8中のA～E(F)の道である。この参道方向には、道路を中心として勝興寺側から「字上町」・「字中町」・「字浦町」・「字下町」の4小字から構成されており、この範囲が上町・中町・浦町・下町の四町から構成される勝興寺寺内町の中核的な範囲と考えることができる。ただし、下町については、その大部分が標高8m以上の部分に位置する他の三町とは異なり、段丘崖から下、そして小矢部川方向に向かって伸びている。さらに後述する文献資料においてもその名称が出てくるのが天保14年(1843)以降であり、寺内町を起源とするだけでなく、新しく伏木港を軸とした港湾集落として形成された部分としても考えることができる⁶⁵⁾。町はこの参道を中心として形成されているものの、図9からも判るように、先に挙げた「新川縣第十六大区小一区越中國射水郡古府村地引繪図」(明治8年)・「富山縣射水郡伏木町大字伏木古国府町地引繪図面」(年不詳、明治30年前後)および両図よりも古い「古府村地引繪図」(明治6年)においても、この一帯の土地が勝興寺住職名義となっており、上町・中町・浦町・下町が勝興寺の管轄

下に置かれ、中心寺院による寺内町の支配構造が窺えるとともに、これら一連の地籍図上では四町の地割が描写されていない。

そこで、参道を軸とする上町・中町・浦町(下町)の屋敷割を示す絵図として掲げたのが図11(部分)である。ここから、四町が参道を軸として短冊型地割からなる両側町が形成されていることがわかる。自然地形上の諸制約から、奥行きは一定しないが、間口は3間前後である。また川上貢が中町を中心とした近世期の屋敷図分析ならびに7つの町屋建築について調査を行っており、それによると中町での間口は3～3.5間が標準で、奥行きは10～20間のものが多く存在することが指摘されている⁶⁶⁾。さらに、図11の絵図から判読できる情報として、参道に沿った一筆毎の敷地面積をみると、上町は計19筆で平均63坪、中町は計48筆で平均46坪、浦町は計14筆で平均43坪、下町は計43筆で平均30坪であった。特に上町と中町・浦町、そして下町の3つの差が大きい。上町については浄光寺・承德寺などの一般屋敷よりも面積が広い傾向がある境内地が存在するため、それを除外すると平均49坪となるが、やはり平均面積は最大となる。全体的に見ると、一筆面積は上町から下町へゆくにつれて、かつ勝興寺からの距離



図11 上町－中町周辺の町割
中央参道左側が勝興寺。
出典：小谷家所蔵絵図(作成年・図題欠落のため不明。部分)

が離れるにつれて小さくなる傾向が見られ、住民の階層や職業とも連関しているものと考えられる。特に浦町・下町については、段丘崖に近接する地形形状の制約もあり上町・中町に見られない10坪以下の屋敷地も多く存在することに注目できる。また、東館・串館の一部にも、とくに上町・中町に接する部分において短冊形地割が確認でき、集落がもう少し広く形成されていたものと考えられる。

つぎに近世期における寺内町の人口・軒数の推移についてみる。前述の天明6年(1786)「古国府勝興寺明細帳」によると門前家数は84軒、人数は男165名、女154名の合計319名であった⁶⁷⁾。また住民数の変遷ならびに職業別構成については、古国府の肝煎・町年寄をつとめた塩屋家所蔵の「塩屋家文書」を通してその概略を知ることができる⁶⁸⁾。さて、「塩屋家文書」には、近世期の家数を知る時期として、享保14年(1729)から天保14年(1843)までの8期が存在する。これらの資料を併せて古国府における軒数・人口の推移を示したのが表1である。ここから判るように、下町は天保14年で初出するが、全体として軒数は18世紀の段階では80台で推移していたのが、19世紀に入ると100を超える軒数となり、人口・軒数が増加していることがわかる。また、これらの数値は勝興寺の人数を含めてお

らず、先に触れた天明6年の段階においては、寺院・町を併せて413人の規模であった。

つぎに、近世期における古国府の住民の職業構成についてみると、安永7年(1778)・文化10年(1813)・天保14年(1843)の3時点における職業構成を知ることができ、そのうち天保14年については町毎の状況を窺うことができる。表2はその推移を表したものであるが、注目されるのは日用取(稼)・あるいは船持ち・渡海船水主、また川舟稼ぎと舟運に関連した職業が多いことである。古国府と接する伏木は、小矢部川水運と北前船舟運の寄港地という重要な湊として近世に機能しており、こうしたことから古国府にも舟運関連業に従事する者が多く居住していたことがわかる⁶⁹⁾。また文化10年と天保14年については、主たる職業と共に兼業が記載されているが、これによると百姓宿、荷問屋あるいは刻みたばこ・鉄・小間物商など他との兼業だけの職種がある一方、茶・蠟燭売りのように専業・兼業が並存する職種が存在する。前者の兼業のみの職種に多く見られるのは、多角的な経営を行う有力者が取り扱うことが多く、例えばこの資料元である塩屋茂兵衛宅では、文化10年段階では干鯛商売の他、船商売、荷問屋、百姓宿から茶の売買まで商いを行っており、舟運業を機軸として関連する流通・商

表1 享保14年～天保14年間の古国府の軒数・人口の推移

年次	上町		中町		浦町		下町	合計			
	軒数	人口	軒数	人口	軒数	人口	軒数	軒数	人口	男	女
享保14年(1729)	—	—	—	—	—	—	—	84	—	—	—
安永7年(1778)	—	—	—	—	—	—	—	81	—	—	—
天明6年(1786)	—	—	—	—	—	—	—	84	319	165	154
文化9年(1812)	21	—	30	—	40	—	—	91	—	—	—
文化10年(1813)	—	—	—	—	—	—	—	118	—	—	—
文化10年(1813)	33	105	34	158	45	214	—	112	477	244	233
文化13年(1816)	—	—	—	—	—	—	—	—	350	178	172
文政年間(1818—1829)	22	—	31	—	41	—	—	94	—	—	—
天保14年(1843)	22	—	33	—	18	—	51	124	—	—	—

注：—は記載が見られない項目

出典：天明6年は「古国府勝興寺明細帳」、他の年次は『塩屋家文書』による。

表2 古国府における職業構成の推移

	安永7年 (1778)	文化10年(1813)		天保14年(1843)	
		主	兼	主	兼
大工	1	1			
家大工頭				1	
家大工				3	
船大工	1	1		1	
大鋸		2			
木挽		1		1	
壁塗	1	1			
桶屋		3		5	
荷問屋	2		2		
諸荷物送り方			1		
百姓宿			3		
百姓共干鰯類取次宿	5				
米小売商売				1	
米小売商売・日用稼				2	
酒請売	4	4			
清酒并綿商売				1	
清酒并豆腐商売				1	
清酒并米小売商売				1	
酢醤油請売	1	1	1		
大豆小豆			2		
味噌商売		2			
味噌油商売				1	
味噌并蠟燭等商売				1	
豆腐			1		
油請売		1	1		
塩		1			
砂糖売買			1		
茶(村上茶) 売	1	2	2		
刻たばこ小売			3		
紙、たばこ小売				1	1
干鰯商売		2	1		
蠟燭売買		1	2		
炭・薪木商売				1	
鉄売買			1		
小間物商売	1		1		
古手商売		1			
質屋(小質)		1		1	
風呂屋		1			
髪結				2	
煮売茶屋				1	
縁綿			1		
綿打商売		1	1	5	
諸色染物		1		1	
綿木綿請売并糶			1		
日用取(日用稼)	41	49		35	
日雇				4	
船持	23	41			
渡海船水主				4	
渡海船商売				3	
川船稼				42	
川船方商売				2	
川船并綿小売				1	
尿物仲買				1	
尿物仲買并渡海船				1	
合計	81	118	25	124	1

注:「主」は主たる職業,「兼」は兼業と思われるものに分割して表記した。桶屋(文化10年)のうち一軒は(屋根屋)と併記。
 出典:『塩屋家文書』

業に深く関わっていたことがわかる。

また、人口に比して米・酒・味噌といった基本品から蠟燭・古手(古着)・質屋まで多様な小売業が多く存在していることにも注目できる。こうした小売業者の多さについて、正和勝之助は多数の参詣者に対応したものと指摘しているが⁷⁰⁾、むしろそれ以上にこの古国府が周辺地域において一定の中心性を持つ機能を有していたことが考えられる。また、茶については安永7年では「茶売」表記であったのが、文化10年では専業とする2人についてはいずれも「村上茶商売」と表記されており、越後国村上という特定産地の茶販売を専らとしていたことは、同じく北前船寄港地(村上一岩船港)としての関連からも興味深い。

さて、次に天保14年における町別の職業構成について見ると(表3)、まず注目されるのは、舟運およびこれに関連する職業従事者が、上町には少なく、湊に近い下町・浦町・中町に集中していることである。特に勝興寺から最も離れ標高の低い所に位置し、伏木に隣接している下町では、町内に居住する51人のうち45人が舟運関連業に従事していることに注目できる。先に触れたように北前船寄港地としての性格から舟運業との繋がりが強いことは渡海船水主が全町に存在することからも判るが、とりわけ下町との関連性が日用取や日雇い、川船稼ぎといった労働に特化した形で現れている。また小売業は分散傾向にあるものの、清酒を除いた食料品は浦町・下町に多く存在する。一方、紙やタバコといった文具、嗜好品の一部は上町にしか存在しない。また建築・船大工に関連しては、各町に分散しているものの、家大工頭・船大工は上町にのみ居住している。このように、職業構成は上町～下町の町ごとにいくつかの特徴や階層性が存在することが指摘できる。

こうした参道を基軸とした古国府寺内町の構成は、上町～下町へと標高が下っていく構

表3 天保14年(1843)における古国府町別職業構成

	上町		中町	浦町	下町	合計
	主	兼				
家大工頭	1					1
家大工			1	1	1	3
船大工	1					1
木挽			1			1
桶屋	2		2		1	5
米小売商売					1	1
米小売商売・日用稼				1	1	2
清酒并綿商売	1					1
清酒并豆腐商売				1		1
清酒并米小売商売					1	1
味噌油商売				1		1
味噌并蠟燭等商売			1			1
紙、たばこ小売	1	1				2
炭・薪商売			1			1
綿打商売	4		1			5
染物			1			1
質屋				1		1
髪結			1	1		2
煮売茶屋					1	1
川舟稼			9	4	29	42
川舟并綿小売			1			1
日用稼	11		8	4	12	35
川舟方商売			1		1	2
日雇			3		1	4
渡海船水主	1		1	1	1	4
渡海船商売			1	1	1	3
尿物仲買并渡海船				1		1
尿物仲買				1		1
合計	22	1	33	18	51	125

注：職業名は資料掲載名称をそのまま使用した。
 出典：「天保14年町名、家名、商売等御調理二付書上帳」
 『塩屋家文書』

成になっており、勝興寺を最高地点として立体的な構造となっていることに注目できる(図9)。こうした寺内町の内部構造は、やはり先に触れた枚方寺内町における上町・下町・蔵の谷の三町の相互関係とも類似していることが指摘できる⁷¹⁾。また、古国府に建設された寺内町プランと、安養寺期あるいはそれ以前のものとの直接の類似性は確認できない。安養寺期に二重に囲郭されていた全体構造は、古国府においては自然地形を生かした形で御堂敷地を中心に堀・土塁を構築する形に変化している。

最後に触れておきたい点は、安養寺・古国府ともに「御亭」・「御亭角」と称する地区が内在、あるいは古国府においては南西部に隣接していることである。「亭」とは「眺望また

は休息のために庭園内に建てられた小屋・あずまや⁷²⁾を意味し、また特に本願寺においては一家衆や高僧との相伴の場として、仏事と遊興の両面の機能を備え、真宗寺院の伽藍配置を考える上で重要な建築物であるが⁷³⁾、同様の機能を持つ場所・施設が両者に存在し、かつ勝興寺移転に伴い古国府へ移った可能性を想定することができる。

IV. 寺内町の計画性の存在

こうした寺内町の形態を考えていくとき、各寺内町間に形態上の何らかの関連性・類似性が存在するように考えられる。御影堂・阿弥陀堂の二堂を中核として御亭など主要建築物とともに形成される本願寺ないし本願寺系寺院の建築様式・伽藍配置が、本山である本願寺を宗教的階層構造の頂点とし、一門寺院・一般末寺・道場等において、歴史的変遷や社会経済的な諸制約のなかで継承されていくことを考えると、こうした寺院を中核として形成される宗教都市としての寺内町の可視的な形態にも、何らかの相互間の影響や、あるいは継承性といった問題が存在するのではないだろうか。

こうした視点に立つときに、その計画性は相互の寺内町の形態、および寺内町立地の特性に見ることができるのではないかと考える。

立地上の特性については、例えば淀川中流域を基軸とした山科・大坂石山の二拠点の本願寺寺内町、およびその中間地点に位置し、淀川水上交通上の中継地として、そして陸上交通と淀川水運との結節点として、さらに宗教的・軍事的にも相互に関連した枚方・出口・富田・招提の寺内町群について、その立地に計画性が存在する可能性を筆者はかつて指摘した⁷⁴⁾。また相互の寺内町の形態については、本願寺寺内町、特に山科-石山-下京間において本願寺境内の形態と規模が類似していること、また山科-石山間における形態上の類似性が認めうるのではないかと考え、

こうしたことから本願寺系寺内町プランの継承性の可能性について指摘した⁷⁵⁾。こうしたプランの継承性については、例えば本願寺寺内町や中核的な町を一つの基本プランとし、地形条件や社会経済上の諸制約から当該地域に則したかたちで変容を受けつつ、プランが継承されていく可能性が想定でき、そこに町建設の計画性が存在したのではないかと考える。

まず、寺内町の町と通りの関係に着目すると、近年、藤田実が摂津国塚口・出口を中心対象とした論稿の中で、街道・木戸口と町の関係について、木戸口から伸びる街路が軸となって町が形成されている点、すべての町が寺内を通る街道上に位置付けられる点などを指摘している⁷⁶⁾。しかし本稿では、まず寺内町が真宗寺院を中心とした計画的な都市であるという理由から、さらには足利健亮⁷⁷⁾・矢守一彦⁷⁸⁾を中心に議論が展開されてきた、城下町における町と通りの関係性が、結果としては街道という要素が加わるものの、基本概念としては城の大手通りを基軸に論じられてきた研究史が存在することから、さらに足利健亮は、城下町と並んで富田林寺内町における「町」と「筋」について論じていることから⁷⁹⁾、城下町の大手通りに対応する寺院・御坊の主要門からの参道と町の関係について着目してみたい。

北陸寺内町の中では、先に触れた古国府や図12の吉崎寺内町が、中心寺院の参道に沿って町が形成されていく、いわゆる「タテ町型」寺内町であることが指摘できる。

この町と通りの関係性については、北陸以外の他の寺内町においても確認することができる。図13は現在の枚方市招提に位置する招提寺内町の推定範囲における小字分布図である。招提寺内町は、天文12年(1543)前後に、近江国の片岡五郎右衛門尉正久と河端綱久が、蓮如第六男の蓮淳を招請して建設された寺内町である。ここでは中心寺院の南から

伸びる参道が基軸線となり、東町・中町・西町がこれに平行な形で長方形街区が形成される、吉崎や古国府と共通する「タテ町型」の構造をしていることがわかる。

さらに吉崎における参道である馬場大路は、門前から直線に東に伸び、北に90度直角に逆L字型に屈曲しており、この逆L字の構造は、古国府寺内町と大変よく類似している

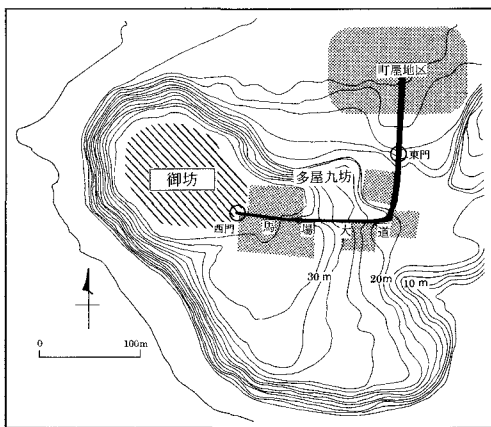


図12 吉崎寺内町における町と通りの関係

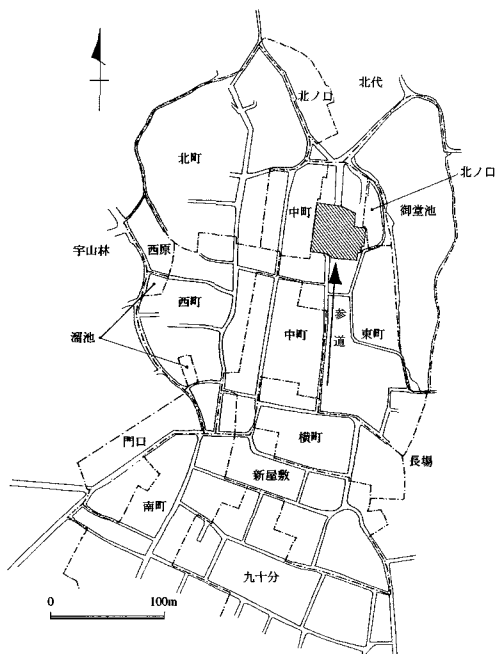


図13 河内国招提寺内町における小字分布

る。2つの町の建設時期は大きく隔絶しており、勝興寺自体が既に述べてきたように土山→高木場（高窪）→安養寺→古府へと寺基を移しているものの、吉崎から古国府への影響が存在した可能性が考えられる⁸⁰⁾。

さらにこのことは単に北陸寺内町に限らず、例えば畿内において一門寺院を中核として形成された枚方寺内町においても、同様に順興寺から上町-蔵の谷-下町へと町が形成されている。順興寺からの参道と、隣接する北東方向への上町部分における町と道のあり方には共通性が見られる。また、山科本願寺寺内町においては、その門前・参道のあり方が不明確であるが、現在の関連町名として、寺内町の北東方向に「西野大手先町」が存在し、この方向が、古国府や吉崎と同様に、参道が延長するいわば大手方向に相当する可能性がある⁸¹⁾。

中心寺院から東-北方向へ屈曲して伸びる参道を中心として町が形成される点は、寺内町を宗教都市として捉えていく上でも重要である。浄土真宗寺院がその阿弥陀信仰から西方浄土を指向する基本的な性質上、本堂が東面し、その結果として東側に参道が形成される点は、宗教都市としての基本的構造として指摘することができる。

さらにこのことは、単に二つの寺内町の類似性と捉えるよりも、吉崎の有する属性が蓮如の居住した本願寺系寺内町であった点に注目するならば、本願寺系寺内町から一般寺内町へと、宗教組織上の階層性に沿うかたちで、都市のプランが継承されていった可能性が想定できるのではないだろうか。

さて、こうした「タテ町型」の構造に対して、例えば北陸寺内町の中でも城端寺内町は、中心寺院である善徳寺の参道に直行する街路の方向に対して町が形成される、いわゆる「ヨコ町型」寺内町である(図14)。永禄年間(1558~70)に城端城主、荒木大膳の請願により形成された城端では、参道方向に対し

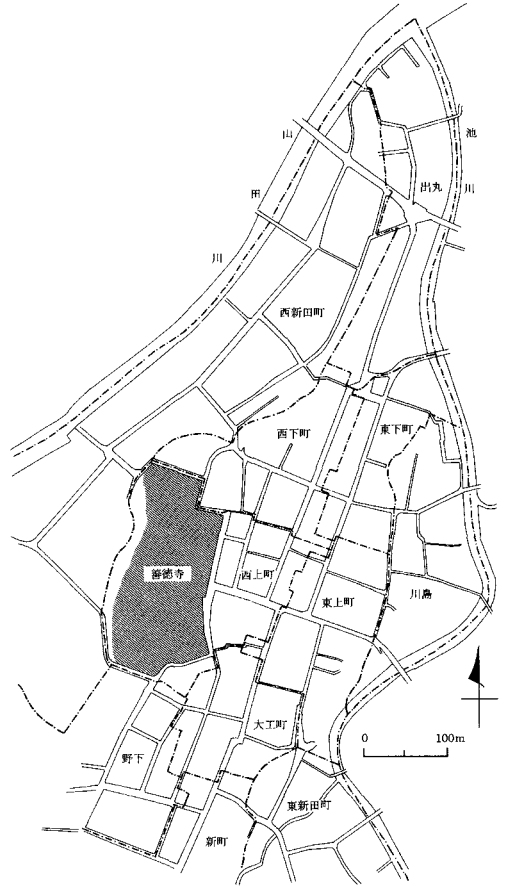


図14 城端寺内町における町と通りの関係

て直交する街路に東西の上町・下町、大工町、出丸町が形成されており、門前通りに直行する方向の街路に町通りが形成される、いわば「ヨコ町型」の内部構造を有することが指摘できる⁸²⁾。このことは、建設時期や建設主体、寺内町プランの変容という意味からも捉えられる問題であり、先に述べた藤田が指摘する街道と寺内町立地との関係とも密接に関連し、城下町プランにおける変容との対比も可能である。

V. おわりに

本稿では、越中国に存在する井波・勝興寺・城端などの寺内町に焦点を当て、特に勝興寺については従来あまり明確にされてこな

かった四時期（ただし、古国府の建設時期においては寺内町としての性質はかなり失われているが）にわたる御坊および寺内町の形態を中心とした復原、および形態上の特質を中軸として比較考察を行なった。

まず立地上の特質として、北陸寺内町の多くは河岸段丘上や台地端に位置し、周辺とは高度差を伴って防御される地形であり、自然地形を活かしつつ土塁・堀で囲郭する点に注目できる。また安養寺期・古国府期の勝興寺に代表されるように、陸路と水路の結節点に位置するなど高い交通の利便性を有していた。また吉崎では、内部構造においても御坊・多屋九坊・一般門徒の居住地区のそれぞれが、標高差と木戸門を伴って隔絶され、居住者の属性上からの階層性が確認しうる。この点においては、古国府・勝興寺寺内町も同様の構造を有しているものと考えられる。城端は町全体が周囲との標高差を有しており、また井波も明確な高度差は伴わないものの、郭によって区分された内部構造を有しており、寺院と居住者の明確な区分が存在する点に共通性が見いだせる。そして立体的な内部構造は北陸寺内町に限らず、例えば枚方寺内町においても共通することを確認してきた。

さらに、こうした寺内町の建設プランの共通性として、参道が町形成の基軸となる「タテ町型」の構造を有しており、後に作られる「ヨコ町型」と対照的な構造を示している。さらに参道が東から北へ直角に逆L字型に屈曲する構造を示している点を確認することができる。参道が中心寺院から北東方向へと展開し、町の構造がこれを基軸として構成されることについては、東方へ延びることについては前述のような説明が可能であるが、北側への要素については充分理解できるとは言い難い。さらにこの2要素を内包する北東の方位に関しては、前述のように山科・大坂石山・下京の各本願寺寺内町において、その本願寺境内地北東部に共通して入隅が確認でき

ることを筆者は既に指摘しており⁸³⁾、また岡田保良・浜崎一志は、山科本願寺寺内町の土塁遺構にも、北東部に入隅が存在し鬼門除けの思想が存在することを指摘している⁸⁴⁾。北東（丑寅）の方位は、一般に鬼門に相当する特定の概念を持った方位であり、その考え方は古来より建物レベルはもとより、都周辺の寺院配置についても言及されてきた。しかし、陰陽道や民間信仰に囚われない真宗寺院において、いかに特定の方角が指向されるのか、その宗教上の理念が可視的な都市構造にどのように反映されていくのか、宗教都市としての側面を重視した研究が今後必要となってくるものと考ええる。そうしたプロセスを通して、都市建設における基本的なプランの解明に繋がるものと考ええるが、このような問題点に関しては今後の研究課題としたい。

〔付記〕

本稿の作成に関しては、高岡市教育委員会、高岡市立伏木図書館、福光町立図書館、福光町教育委員会、小矢部市教育委員会、ならびに小矢部市史編集室の牧野潤氏をはじめとする小矢部郷土史会の各位より、対象地域に関する貴重な史料、ならびに現地調査について御教示を賜りました。また小谷秀範氏には所蔵される貴重な絵図類や古文書類に関して御協力を賜りました。なお、所収図3・5・6・8につきましては森図房の森三紀先生に作図いただきました。記して御礼申し上げます。

また、本稿脱稿後、金井年氏による北陸の寺内町に関する玉稿「北陸の寺内町の復原的研究―越中国北野寺内の事例」金沢星陵大学論集36-2、2002が刊行された。対象地域としても、また地割から寺内町復原を行なうという手法からも本稿とも関連する優れた研究であるが、本稿内では紹介し得なかったことを記しておきたい。

（京都大学大学院人間・環境学研究科）

〔注〕

- 1) 太田牛一・榊山潤訳『信長公記(下)』教育社、1980、181～182頁。
- 2) 碧海郡明治第二尋常小学校『油ヶ淵ト応仁

- 寺』, 1934。碧南市立西端小学校百年誌編纂委員会編『西端小学校百年誌』, 1973, 61～63頁。なお、愛知県公文書館所蔵の地籍図作成段階では既に小学校敷地となっており、筆界・小字名称などからその堀の正確な位置比定をおこなうことは困難であるが、窪地が現存し、かつ現在でもゲートボール場等に転用されている。
- 3) 西川幸治『日本都市史研究』日本放送出版協会, 1972, 71～165頁。
 - 4) 牧野信之助「中世末における寺内町の発達」史学雑誌41-10, 1930, 32～66頁。
 - 5) 牧野信之助「城端雑記」(同『武家時代社会の研究』刀江書院, 1928) 317～330頁。
 - 6) 藤岡謙二郎「寺内町の性格」人文地理1-1, 1948, 41～47頁。
 - 7) 前掲3) 71～165頁。
 - 8) 水田義一「寺内町の形態再考」歴史地理学会会報96, 1978, 15～26頁。
 - 9) 金井年「吉崎における中世的景観と近世的景観～絵図を通して～」歴史地理学紀要26, 1984, 187～202頁。
 - 10) 土屋久雄編『古図からみた吉崎御坊跡』, 金津町教育委員会, 1987, 1～28頁。
 - 11) 金坂清則「解題31: 吉崎御坊并門前町絵図」『福井県史 資料編16上絵図・地図』福井県, 1990, 68頁。
 - 12) 仁木宏「吉崎の歴史環境」(『中世大阪の都市機能と構造に関する調査研究～大阪学調査研究報告書2 吉崎「寺内」の調査研究～』大阪市立博物館, 1999) 4～13頁。
 - 13) 金井年「絵図からみた吉崎御坊周辺～照西寺本吉崎御坊絵図と明治期地籍図」, 酒井一光・大澤研一「照西寺本吉崎御坊絵図の基礎的検討」, 前掲書所収, 21～25頁, 33～41頁。
 - 14) 中井均「吉崎御坊の構造～縄張り視点から見た現地遺構～」, 前掲書所収, 26～32頁。
 - 15) 大澤研一「吉崎「寺内」について」, 前掲書所収, 43～48頁。
 - 16) 吉岡英明「勝興寺附近遺存の湫壘について」(上)(下), 越中史壇19・20, 1960, 9～40頁。
 - 17) 富山県教育委員会「越中国分寺とその周辺の遺跡調査報告書」, 1967。「越中国府関連遺跡調査概報Ⅰ～Ⅷ」高岡市教育委員会, 昭和61年度～平成2年度。
 - 18) 佐伯哲也「越中の平地・台地城郭について」, 越中の中世城郭3号, 1993, 57～108頁。
 - 19) 最近のものとしては金龍教英「越中教団」(浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座 蓮如 第6巻』, 平凡社, 1998) 187～228頁, 濱岡伸也「蓮如と加賀」(同上) 229～254頁, 木越祐馨「阿岸本誓寺文書にみる能登本願寺派について」(同上) 255～276頁, 小泉義博「越前における真宗の発展」(同上) 277～316頁, 吉井克信「戦国期若狭における蓮如の足跡と真宗の受容」(同上) 317～336頁, 吉井克信「真宗史からみた吉崎とその周辺」, 前掲12) 所収, 14～20頁。
 - 20) 土屋敦夫「第128回例会報告 前田氏以前の金沢のプランに関する考察」比較都市史研究2-1, 1983, 8～9頁。
 - 21) 真宗大谷派教学研究所編『蓮如上人行実』, 真宗大谷派宗務所出版部, 1994, 191～208頁。なおこの資料を分析して発給先の地理的分布について言及したものに, 天野太郎「中世末期における真宗拠点の地域展開に関する一考察」, 平成8～10年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2))研究成果報告書『地域システムの動態に関する比較・統合研究』(研究代表者: 成田孝三京都大学教授), 1999年3月, 40～56頁がある。
 - 22) 金龍教英「越中教団」(浄土真宗教学研究所・本願寺史料研究所編『講座 蓮如 第六巻』平凡社, 1998所収) 187～228頁。
 - 23) 「反古裏書」(堅田修編『真宗史料集成第2巻』同朋舎, 1976) 746頁
 - 24) 『闘争記』(宇野次四郎編『井波誌』, 町立井波図書館校友会, 1937) 76～78頁。
 - 25) この点に関して『井波町史』では, 勝興寺(安養寺)が砺波地方では蓮如系寺院として優勢であり, 二寺が両立あるいは対立する事もあり, 対抗意識が存在していたと指摘している。『井波町史 上巻』井波町, 1970, 326～327頁。
 - 26) 前掲24) 77～78頁。
 - 27) 岫順史『勝興寺古文書集』桂書房, 1983, 114頁。
 - 28) 前掲24) 78頁。

- 29) 前掲24) 75頁。
- 30) 『故墟考 卷之一越中三郡』, 石川県図書館協会編『越登賀三州志』, 石川県図書館協会, 1933, 539~540頁。
- 31) 第九師団司令部編『第九師管古戦史』1940, 501~502頁。
- 32) 『井波町史 上巻』井波町, 1970, 326頁。またこの点に関して高岡徹は, この井波城郭図が基本的に戦国末期の井波寺内町の姿に近いものと考えている。高岡徹「南砺波の城砦群と中世の様相」(『井口村史』井口村, 1995) 93~97頁。
- 33) 地籍図としては, 「新川縣第二十四大区小四区越中国砺波郡井波町松嶋村入会領地引絵図」(明治8年), 「新川縣第二十四大区越中国砺波郡井波町地式(ママ) 絵図」(明治8年), 「新川縣第二十四大区越中国砺波郡松嶋村地引絵図」(明治8年, 以上富山法務局砺波支局蔵) を利用し, 『富山県東砺波郡井波町土地宝典 地番反別入地図』帝国市町村地番反別入図刊行会, 1940(井波町立図書館蔵) を補助的に利用した。
- 34) 国府関連遺跡については, 『越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ』高岡市教育委員会, 1988, 1~16頁, 『越中国府関連遺跡調査概報Ⅶ』高岡市教育委員会, 1991, 7~14頁。また勝興寺は本堂をはじめ12棟の建造物が重要文化財建造物に指定されており, その伽藍規模とともに地方における真宗寺院としては別格の存在である。この他に本寺院では「洛中洛外図屏風」などの重要文化財を所有している。
- 35) ここでは, 瑞泉寺, 勝興寺, 善徳寺の移動について触れている。金龍静「蓮如教団の発展と一向一揆の展開」, 『富山県史』通史編Ⅱ中世, 富山県, 1984, 726~727頁。
- 36) 「勝興寺系譜」(土井了宗・金龍教英『越中真宗史料』桂書房, 1997) 734~755頁。
- 37) 『福光町と蓮如の関係調査報告書』福光町文化財保護委員会・福光町郷土文化調査委員会, 1999, 20~25頁。
- 38) 金龍静「戦国期一向宗教団の構造」(千葉乗隆編『本願寺教団の展開』永田文昌堂, 1995) 123~153頁。
- 39) 土山における伝蓮如の遺構, 旧跡, 杉浦家との関連については, 福光町教育委員会ならびに福光町文化財保護委員の定村武雄氏に御教示をいただいた。なお, 富山県福光町医王山文化調査委員会編『医王は語る』福光町, 1993, 101~102頁では2箇所の推定地を挙げているが, 面積が狭く傾斜地にあること, また地元の伝承などから, 本稿での推定地の方が適切ではないかと考える。
- 40) 「新川縣管下第二十二大区小四区越中国礪波郡高窪村地引絵図」(明治8年), 富山法務局礪波支局蔵。
- 41) 荒井清勝『大笹久兵衛』1998(私家本), 18~23頁。福光町立図書館蔵。なお, 富山県福光町医王山文化調査委員会編『医王は語る』福光町, 1993でもこれらの地名が提示されているが, 小字名とされておりこれは誤りである。
- 42) 前掲36) 738頁。
- 43) 宮永正運著, 岩倉規夫他校本解説校注『越の下草』富山県郷土史会, 1980, 44~45頁。この引用部分の原本は国立公文書館内閣文庫本によるものであり, この他に稿本とされる東京大学史料編纂所本が存在するが, こちらでは集落及び戸数に関する記述はみられない。
- 44) 長田清作「雲龍山勝興寺由緒併に石動町附近の関係遺跡」1961(私家本), 1~10頁。
- 45) 現在は渋江川に架かる橋名となっている。
- 46) 2001年9月26日に開催された小矢部郷土史会現地研修会において, 大谷昭三氏・牧野潤氏をはじめとする小矢部郷土史会の各位に御教示をいただいた。
- 47) 富山県福光町医王山文化調査委員会編『医王は語る』福光町, 1993, 104頁。
- 48) 法務局所蔵の土地台帳による。
- 49) 「安養寺御坊跡見取絵図」(明治14年), 『越中勝興寺伽藍』高岡市教育委員会, 1994, 11頁。
- 50) 前掲44) 7頁。
- 51) 前掲36) 739頁。
- 52) 小矢部市史編集委員会編『小矢部市史 上巻』小矢部市, 1971, 207頁。
- 53) 前掲30) 550頁。
- 54) 斎藤善夫『続富山・石川梵鐘考』北陸石仏の会, 2001, 85~95頁。

- 55) 小矢部市史編集委員会編『小矢部市史 上巻』小矢部市, 1971, 207頁。なお, 現在の小矢部市域には, 慶長3年に今石動(現在の中央町, 市の中心部)に掛所が設置されている。
- 56) 岫順史『勝興寺古文書集』桂書房, 126~130頁。
- 57) 前掲18)。
- 58) 『越中勝興寺伽藍』高岡市教育委員会, 1994, 178頁。
- 59) 両図ともに高岡市立伏木図書館所蔵。また「富山縣射水郡伏木町大字伏木古国府町地引繪図面」については, 製作年等の記載が見られないが, 鉄道敷設用地の記載が見られることから推定した。
- 60) 「古国府勝興寺明細帳」, 前掲58) 150~152頁。
- 61) 「勝興寺史料抄」, 前掲58), 148~171頁所収。
- 62) 関口欣也「本堂・諸堂・門の建築」前掲58) 10~11頁。
- 63) こうした囲郭のありかたは, 寺内町に即して言及するならば, 枚方寺内町においても同様に, 自然地形を活かした囲郭と, それを補う方向にのみ堀を設けた例が確認できる。天野太郎「淀川中流域における寺内町の展開~枚方寺内町プランの復原を中心として~」(足利健亮先生追悼論文集編纂委員会編『地図と歴史空間』, 大明堂, 2000) 232~242頁。
- 64) 現在のJ R水見線(高岡~水見間)は, 当時の中鉄鉄道によって高岡~伏木港間が1900年(明治33)に開通したが, 参道はこれに先立ち, 勝興寺によって独自に1898年に新設された。「雲竜山勝興寺総門先新設道路敷地実測平面図」(縮尺500分の1), 藤井家文書1~12, 高岡市立伏木図書館所蔵。なお本図では, 「新設道路 壱百参拾四間五分」と記され, 旧参道は「勝興寺往来」との記載がある。
- 65) 正和勝之助, 『塩屋古文書写(復刻版)』, 2002, 33~34頁。
- 66) 川上貢「寺内町の町屋と門前寺院」前掲58), 89~90頁。
- 67) 前掲58) 151頁。
- 68) 「塩屋文書」については, 元来高岡市立伏木図書館に寄贈・所蔵されていた史料であり, 高岡市教育委員会から出版された『越中勝興寺伽藍』(1994, 前掲58)でも執筆者が利用されている。しかし, その後所在不明となり, 2002年9月現在でも同図書館ならびに高岡市教育委員会において所在不明である。そうした中で本稿では, 正和勝之助が塩屋古文書の写しを集成し, 私家版として出版された正和勝之助『塩屋古文書写(復刻版)』, 2002を利用する。
- 69) この舟運関連従事者と伏木港との関連性については, 天保14年分の分析を通して川上貢によっても指摘されている。前掲66) 75頁。また下町に隣接した地区には, 文化年間以前より当地にて廻船問屋として繁栄した旧秋元家住宅があり, 現在高岡市立伏木北前船資料館として保存・展示されている。
- 70) 前掲注68) 34頁。しかし参詣者に対応するような飲食店は天保14年の煮売茶屋まで見られず, しかも湊に近接した下町に位置していた。
- 71) 前掲63)。
- 72) 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』小学館, 1975, 586~587頁。
- 73) 真宗教団および本願寺における亭(御亭)の機能に関しては, 櫻井敏雄『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版局, 1997, 565~667頁に詳しい。
- 74) 天野太郎「淀川流域における枚方寺内町の立地選定に関する一考察」, 『地域と環境』第3号, 2000年3月, 81~90頁。
- 75) 天野太郎「大坂石山本願寺寺内町プランの復原に関する研究 ~位置比定と内部構成をめぐって~」, 『人文地理』第48巻第2号, 1996, 22~41頁。なお, この天野太郎の復原案に対する反論が金井年「大坂石山本願寺寺内町の空間構造-最近の学説を中心に」比較都市研究17-1, 1998, 57~69頁や, 仁木宏「大坂石山寺内町の復元・再論」寺内町研究第3号, 1998, 1~20頁などから出され, これに加えて現在では藤田実の復原案も提示される状況となっている。とくに仁木からの問題点の提示-とりわけ文献史料に基づく反論には説得力があり, 筆者の復原案

- には修正すべき点が多くあることは率直に認めざるを得ない。しかし、具体的に文献史料以外の点からの根拠を提示できないため、具体的な再反論、ないしは修正案を提示することが現段階の筆者には出来ない。ただし、仁木・金井の指摘のうち、筆者が文章上誤解を招いたと考えられる点が2つ存在する。まず、寺内町を大坂城三の丸付近に推定しているが、大坂城が三の丸から造られたと考えているわけではなく、金井が指摘するように「大坂城本丸・二の丸は後から追加されたとする」(64頁)とは考えていない。筆者の大坂城三の丸の造営期に誤解があったためであり、この点については弁解の余地はない。正しくは、この堀推定部分が三の丸の外郭に継承された可能性があるという点までしか指摘すべきではなかった。また、これは金井の指摘であるが、山科でも石山でも寺内町の内部の立体性は顕著ではないと筆者が考えているとの指摘がある。しかし、これは氏の誤解あるいは筆者の当論文中での説明不足であり、大坂石山の復原を等高線と共に提示したことから明らかなように、当然立体的な内部構造がみられると考え、高度差によって内部構造を分化させているものと考えている。大坂石山では、最高部分は確かに二の丸(ただしその南辺)であるが、其の周辺は谷が入っているため地形条件からいって町の形態がどのようなであったのか、少なくとも仁木の提示された推定復原図と、復原等高線とでは一致が困難ではないかという趣旨でより南の地域の妥当性を指摘しただけであり、寺内町内部が平坦なものとは想定していない。寺内町の内部構造が平面的なものでないことは、前掲74)でも指摘しており、また本稿でも同様である。
- 76) 藤田実「中世真宗寺内町割の一類型－摂津国塚口寺内を中心に－」、大阪の歴史55, 2000, 95～113頁。
- 77) 足利健亮『中近世都市の歴史地理－町・筋・辻子をめぐって－』, 地人書房, 1984, 1～246頁。
- 78) 矢守一彦「城下町プランにおける「近世－とくに町割りにおける「縦」と「横」について－」(豊田武・原田伴彦・矢守一彦『講座・日本の封建都市 第三巻 地域的展開』文一総合出版, 1981) 144～169頁。
- 79) 富田林寺内町においては東西方向の通りが町通りになり、それに直交する南北の通りが「筋」となる。前掲77) 174～175頁。
- 80) この点については、以前拙稿において予察的に指摘した。天野太郎「蓮如のまちづくり」『人環フォーラム』第6号, 1999年4月, 28～29頁。
- 81) 山科本願寺の構造概略図に関しては、天野太郎「本願寺寺内町～山科と下京」(足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社, 1994) 64～65頁。また、さらに進んで山科の復原プランおよび「大手先」小字の明示を行なった研究として、福島克彦「城郭研究からみた山科寺内町」(山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち－山科本願寺と寺内町－』法蔵館, 1998) 122～154頁が挙げられる。
- 82) 小字界については、城端町地籍図を参照した。また、元禄6年(1693)の城端町の町人構造を記した文献史料である「組中人々手前品々覚書帳」においても、これらの町が存在し、かつ門前通りを軸とする町の形成は見られない。しかし、やや時代の新しい城端町立図書館に所蔵されている「城端絵図」享保11年(1726)には、図に示した町とは別に、門前通りを中軸として「上横町」の存在が描かれている。このため、近世初期の段階では「ヨコ町」型であったものが、18世紀に入り西上町・東上町の一部で門前沿いが一部「上横町」に細分された呼称されものと考えられ、これは明治初期の地籍図作成段階では小字名としては残存しなかった。「組中人々手前品々覚書帳」については、城端町史編纂委員会編『城端町史』城端町, 1959, 182～220頁所収のものを参照した。
- 83) 前掲75) 35～36頁。
- 84) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡とその復原」, 国立歴史民俗博物館研究報告8, 1985, 25～95頁。

Jinaimachi in the Hokuriku District
— Especially on the plan of *Shokoji Jinaimachi* —

AMANO Taro

This paper examined the plan and system of *Jinaimachi* (temple compound town) in Ecchu (Toyama prefecture) of the Hokuriku District, and problems associated with *Jinaimachi*.

Jinaimachi, temple compound towns from the late 15th to early 17th century in Japan, had a characteristic form with walls or moats, and were primarily to facilitate defense against feudal lords (especially Oda Nobunaga) and some Buddhist faction.

Although the spatial and social structure of *Jinaimachi* has been studied principally by historians and geographers, few researches have been under taken on *Jinaimachi* in Ecchu in spite of the existence of such important *Jinaimachi*s as Inami, Johana, and Shokoji. Therefore this paper focused on the location and plan of *Jinaimachi*, while considering common features and succession of *Jinaimachi* plan.

The paper comes to the following conclusion: First, this paper restored the plan of these *Jinaimachi* through analysis of the land register map, old documents, old aerial photos and field-survey etc, and made it clear these *Jinaimachi* located on the river terrace top or the edge of plateau, and have defensive advantage. This three-dimensional internal structure can be checked in the Hirakata *Jinaimachi* (Osaka prefecture) etc. And some *Jinaimachi* located on the node between land route and waterway, it is common feature. A double ditch exists especially in Inami and Shokoji (in Furukokufu and Anyoji), and similarity with the *Yamashina Honganji-Jinaimachi* can also be pointed out. Second, this paper considered the moving of *Shokoji Jinaimachi* from Doyama to Takakiba, Anyoji, and to Furukokufu, seeking convenient location for traffic and considered the changes of the plan and the walls or moats. Third, there is a common feature of the plan especially the relation between Temple and the main approach road in Shokoji (in Furukokufu), Yoshizaki, Yamashina and Hirakata. It is pointed out the possibility religious concept was reflected in such plans and their succession.

Key words: *Jinaimachi* (temple compound town), Shokoji-temple, the succession of the plan of *Jinaimachi*, the wall or moat fortification, main approach